

拡大読書器を用いた PRL 獲得訓練

第三機能回復訓練部 三輪まり枝 山田明子 関口 愛 西田朋美 仲泊 聡

【目的】

「視線の中心付近が見えにくい」これは、黄斑変性や視神経萎縮等の何らかの疾患により、中心暗点などが出現した患者が訴える事柄である。「視線をずらして見やすい位置で視対象を捉えるようになった網膜領域 (Preferred Retinal Locus 以下 PRL)」を使うことがまだ身についていない患者は、日常生活において不自由を強く感じていることが多く、特に文字の読みの際に使用する拡大鏡も必要以上に高倍率のものを使用せざるを得ない状態となる。その場合、なるべく早い段階で「どの方向に、どの程度視線をずらせば良いか」という評価と共に、偏心視が安定して継続的にできるように手助けをする必要がある。そのため我々は PRL を獲得していない患者に対し、獲得を促す指導と共に、PRL 獲得訓練を実施しているので報告する。

【対象と方法】

当院のロービジョンクリニックを受診した視神経疾患および黄斑変性の患者で、PRL が獲得されていない症例のうち、入院による偏心視獲得訓練を希望した 3 症例に拡大読書器を使用した PRL 獲得訓練を実施し、訓練前後での読み速度評価による訓練効果を検討した。

【結果】

読み速度評価として 1 分間に読めた文字数を測定した結果、症例 1 は訓練前の読み速度は平均 6 文字／分から訓練後 21 文字／分へ、症例 2 は訓練前 65 文字／分から訓練後 112 文字／分へ、症例 3 は訓練前 56 文字／分から訓練後 71 文字／分へと各々向上し、訓練効果が確認された。

【結論】

視能訓練士が PRL の評価等に関わる中で、PRL が獲得され、読み速度の改善が見られた。また、3 症例とも、読み速度が速くなったこともさることながら、日常生活においても見えやすくなったことを感想として述べていた。以上のことにより、拡大読書器を用いて行う PRL 獲得訓練の有用性が示唆された。